

留 学 生 通 信

トルコ共和国と日本における 教育研究・日常生活

My Study and Life Experiences in Turkey and Japan



ベジェレン・カディリ

Beceren KADIR

■2008年9月トルコ共和国のウルダー大学工学部機械工学科卒業、2009年4月より名古屋大学大学院情報科学研究科複雑系科学専攻博士前期課程入学、2011年4月同大学院後期課程進学、現在に至る。

■主として行っている研究
・ヒトの触覚情報処理における確率共鳴現象の機構解明に関する研究

■通学先

名古屋大学大学院情報科学研究科複雑系科学専攻博士後期課程在学中
(〒464-8601 名古屋市中種区不老町1/
E-mail: beceren@nuem.nagoya-u.ac.jp)

1 はじめに

私は、トルコ共和国ゾングルダク県エレリ (Zonguldak Eregli) で生まれた。2003年に高校卒業後、ウルダー大学工学部機械工学科に入学した。同大学の学部を卒業すると、すぐ、日本で勉強するために来日した。名古屋大学大学院情報科学研究科に入学して4年になる。現在博士後期課程の学生として修士の時から同じ研究室に所属している。

みなさんが想像されているように、母国と日本では文化、教育、学生生活など多くの点で異なっている。本稿では、外国人の視点で母国と日本における大学・大学院での教育研究と日常生活について述べてみる。

2 トルコ共和国における教育システム

トルコの教育は高等教育省の管轄で、その下の高等教育委員会には高等教育の計画、運営および監督の責任が課せられている。トルコには165を超える大学があり、国家で行われる入学試験にパスすれば入学が許可される。

英語の予備クラスを受ける必要がなければ、学部の年数は、理学、工学、技術、経営、経済、農学などでは4年、獣医学と医学についてはそれぞれ5年と6年となっていて、年数については日本とそれほど大きい差がない。いずれの学部に進学するにしても、英語の熟達度の試験にパスしないと1年間英語だけのクラスを余計にとらなるといけなくなるのが日本と異なる。

トルコの大学では、学期は原則9月から始まるが、大学によって実際に始まる日は多少異なる。各コースを合格するためには、学生には1ないし2回の間試験と最終試験が課せられ

る。ほとんどの大学では、国際標準に準拠した4段階の評点で成績が評価される。

ウルダー大学の評点の仕方はたいへん複雑である。学生の成績は、100点満点で採点されたあと、ベル・カーブシステムと呼ばれる採点法で点数が補正される。この方法では、最高点はAA (4.0) となり、それに続く点数はすべての成績の標準偏差に従って割り当てられる。しかし、40点以下の得点はFF (0.0) となり不可となる。この方式では、5~10人くらいしか「可」にならない難しい講義でも、単位の獲得ができる可能性が広がることになる。とは言っても、4年で卒業するには多大な困難が伴う。

3 名古屋大学の大学院での教育

名古屋大学大学院情報科学研究科博士前期課程の入試では、筆記試験と口頭試験を受けて合格した。博士前期課程の1年目、まずは研究よりも日本語の習得を優先し、2年目で研究に注力した。最終的に修士論文の執筆とそれに続く発表会を無事クリアすることができた。

次に、私がトルコの大学と比較してこれまで名古屋大学で感じたことについて述べよう。名古屋大学では、教えられる学習より自らが主体となって研究することが重要とされているように思う。研究する中で、それに関連した知識を自分自身で習得しなければならない。これに対して、トルコの大学では、とにかく講義の単位をとることに全精力を注いだ。教授も学生も研究より講義を優先していた。その結果、トルコでは研究に対して十分な成果を挙げてこられなかったのではないかと思う。なぜ日本が科学技術でリードしているのか、このあたりに理由があると



図1 国際会議 IRIS 2012 で登壇する著者



図3 ウルダー大学での友達とのトルコ国内旅行



図2 ウルダー大学での卒研で研究室の前で実施した自作の太陽熱調理器の実験風景



図4 名古屋大学情報科学研究科の研究室での歓迎会

思っている。

また、研究室のシステムも日本とトルコでは大きく異なる。まず、教授の下で学ぶ博士前期課程、後期課程、ポスドクの人数については、日本はトルコよりずいぶん多いと思う。設備や共同研究体制など研究環境についても日本は大きく進んでいる。このおかげで、私も論文投稿や国内外会議などに参加する機会を何回も得ることができた。最近では、2012年9月にマレーシアのクチンで開催された International Symposium on Robotics and Intelligent Sensors 2012 で発表することができた。

4 トルコの学生生活

トルコでは、大学に入ってしまうと勉強だけでなく生活もたいへんである。ウルダー大学の学部時代、初年度は学生寮で暮らし、友人ができるとその友人たちと一緒に家を借りて住んだ。友人たちと一緒に住むことが私にとって最も快適な環境だった。共同で家を借りると一人当たりの家賃は驚くほど安くなった。

トルコでは、アルバイトはそんなに一般的ではなく、第一見つけることが日本より難しい。生活費を補うために、

トルコ政府は申請するすべての学生に対して有償の奨学金を交付してくれる。しかしその額は十分ではないので、多くの学生は両親から出してもらっている。

ウルダー大学には、学生に資質を醸成する場を提供するためにいくつものスポーツ施設や文化施設がある。大学が企画した旅行やこれらの施設を利用して、私はウルダー大学に感謝している。

5 日本での生活体験

外国人の立場で、私の日本での生活体験について述べよう。

日本に来る前に、インターネットや友人の話から「文化は似ており、言語の文法も似ており簡単に学べるが、食事はまったく異なる」などの情報を得ていた。日本語を使うのは簡単だと思っていたが、実際はそうではなかった。来日直後は、とてもたいへんだった。当時、私はまったく日本語を話せなかったので、出かけると目的地を探すのが簡単ではなかった。というのは、すべての地名が漢字と平仮名で表記しており、英語がほとんど使われていないからである。もう一つの問題は、食べ物の中で、(宗教上の理由から)

最初は自分で調理したもの以外に日本の食べ物は食べられなかった。しかし、日本語を話せるようになると、生活はとてよくなり楽しくなった。日本人の親切さがわかり、生活はずいぶん楽になった。これが、ジャパニーズ・マジックかなと思う。

日本の物価はトルコの2倍である。とくに果物は大変高いと思う。たとえば、日本のりんご1個の値段で、トルコでは1kg以上買える。また、日本でも友人と家を共同で借りているが、トルコより家はたいへん狭いと思う。しかし、量は好きである。

一番強調しておきたいのは、安全、清潔さ、および資源回収についてであり、それらに対する日本の取り組みには目を見張る。家の中も外も等しく清潔に保っている。日本では、燃えるもの、燃えないもの、ペットボトル、缶などにゴミを分別するが、トルコではそれはない。この分別のシステムは省資源にとつてとてもよく有用なことだと思う。

これまで述べてきたように、トルコと日本では文化、教育、学生生活など異なっている。大学・大学院での研究と学習を通じて両国で経験して感じたことを外国人の視点から述べさせてもらった。